

(3)富山県内の長方形箱形炉の型式分類について

県内における古代の長方形箱形炉はこれまで26基の調査報告例があり、滑川市の安田遺跡を除く25基がすべて射水丘陵に集中している（第42図 表10）。ここでは県内26例との県外2例合せて28例について長方形箱形炉の変遷を検討する。

製鉄炉の型式分類については全国的な視点から土佐雅彦氏〔土佐1981・1984〕や穴澤義功氏〔穴澤1984・1987〕が近世以前の精錬炉について分類を行い、北陸では関清氏が穴澤氏の分類をもとに県内例の位置づけを行っている〔関1984〕。穴澤分類に基づけば県内の長方形箱形炉はすべて木炭層による地下構造を持つⅠ型d類に属する。上記の安田遺跡製鉄炉のみ地下構造に木炭の代わりに川原石が敷き詰められるがⅠ型d類の範疇として捉える。

渡邊朋和氏は送風施設である鞆座の有無と斜面に対する炉の構築方向から分類を行い、「斜面に対して直交して構築され、炉床に厚い木炭の地下構造を持ち、炉の長軸方向一方から排滓するものをⅠA類とし、斜面に対して平行に構築されるものをⅠB類」とし、そのうちフイゴ座の明確なものを1、明らかでないものを2と細分を行った〔新津市教委1998〕。富山県内ではこれまでフイゴ座の明確な事例は見つかっておらず、現段階では総てⅠA2・ⅠB2類に属する。炉の構築方向による時期差は、排滓の効率面から「斜面に対して平行：横置き」→「斜面に対して直交：縦置き」に推移したと想定されていたが、石太郎Ⅰ遺跡1～3号製鉄炉の事例では同一箇所直交から平行への造り替えが見られ、平行＝古段階という認識を覆した。

今回試みた炉の分類（表9）では北陸の長方形箱形炉の特徴である「充実した地下構造」部分に着目し、掘り方面積・長軸短軸比率によってⅠ・Ⅱ・Ⅲの3つの時期に分けた。Ⅰ期は県内の製鉄開始段階にあたり8世紀前半に属する。Ⅱ期は長方形箱形炉の盛行期にあたり8世紀後半～9世紀第1四半期に属する。Ⅲ期は長方形箱形炉から半地下式竪形炉への移行期にあたり9世紀第2四半期に属する。

帰属年代は当該炉及び関連遺構からの伴出遺物・操業時期を同じくする炭窯の編年区分によった。

Ⅰ期 帰属年代は8世紀前半。長軸・短軸比率は3：1～2：1。構築方向は斜面に平行・直交の両方がある。完掘事例は少ないが石太郎G遺跡1号製鉄炉が該当する。

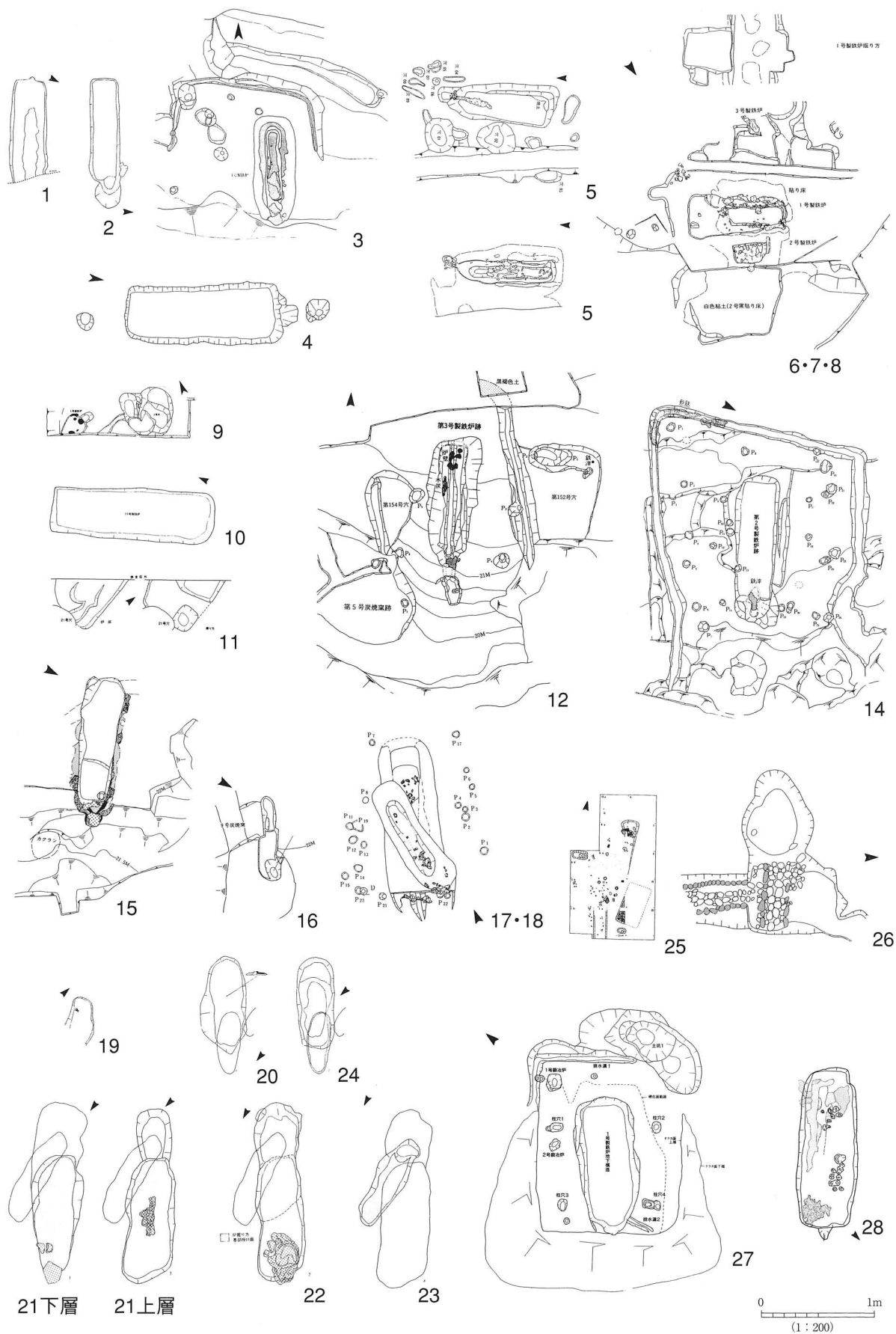
Ⅱ期 帰属年代は8世紀後半～9世紀第1四半期。長軸・短軸比率は3：1を主とするが、時代が下がると4：1とやや長軸が長いものも見られる。短軸（炉幅）は1～2mと広がり、平面形で5㎡を超える大きな地下構造となる。構築方向は斜面に平行・直交の両方がある。15基が該当し、長軸下方に排滓用ピットや周囲にコ字排水溝等施設が付帯するものもある。池多南遺跡2号炉、小杉丸山遺跡2期調査2号製鉄炉等が該当する。

Ⅲ期 帰属年代は9世紀第2四半期。長軸・短軸比率は3：1を主とし、4：1～5：1など細長いものも見られるが全体的に小規模化する。椎土遺跡A地区1・2号炉、塚越A遺跡2号炉などが該当する。

今回の分類では斜面平行構築の炉の帰属年代はほぼ8世紀代に限定される。炉本体である上部構造については炉壁・炉床が良好に残存するものが県内では6例のみで、更なる調査例の蓄積が必要であるため今回は検討対象としなかった。（近藤）

表9 富山県内長方形箱形炉編年

区分	分類	No.	遺跡名	遺構番号
8世紀	前半	5	石太郎G	1号製鉄炉
		9	東山Ⅰ	製鉄炉
		25	囲山東	製鉄炉
		27	林 A地区	1号製鉄炉
	後半	3	南太閤山Ⅱ	1号炉
		4	石太郎C	製鉄炉
		8	石太郎Ⅰ	3号炉
		10	東山Ⅱ	11号製鉄炉
		11	東山Ⅱ	12号製鉄炉
		1	池多南	1号炉
		7	石太郎Ⅰ	2号炉
		17	椎土 D地区	1号炉
		2	池多南	2号炉
		6	石太郎Ⅰ	1号炉
		26	安田	製鉄炉
		28	居村 E地点	1号精錬炉
	9世紀	13	小杉丸山	2期第1号製鉄炉
		14	小杉丸山	2期第2号製鉄炉
		12	小杉丸山	1期第3号製鉄炉
	前半	18	椎土 D地区	2号炉
		22	塚越A	製鉄炉04
		23	塚越A	製鉄炉05
		24	塚越A	製鉄炉06
		15	椎土 A地区	1号炉
		16	椎土 A地区	2号炉
		19	塚越A	製鉄炉01
		20	塚越A	製鉄炉02
		21	塚越A	製鉄炉03



第44図 長方形箱形炉集成（表10と対応）